さるほどに、源平両方陣をあはす。陣のあはひわづかに三町ばかりに寄せあはせたり。源氏も進まず、平家も進まず。勢兵十五騎、楯の面に進ませて、十五騎が上矢の鏑を平家の陣へぞ射入れたる。平家また謀とも知らず、十五騎を出だいて十五の鏑を射返す。源氏三十騎を出だいて射さすれば、平家三十騎を出だいて三十の鏑を射返す。五十騎を出だせば五十騎を出だしあはせ、百騎を出だせば百騎を出だしあはせ、両方百騎づつ陣の面に進んだり。互ひに勝負をせんとはやりけれども、源氏の方より制して勝負をせさせず。源氏はかやうにして日を暮らし、平家の大勢を倶梨迦羅が谷へ追ひ落とさうどたばかりけるを、すこしもさとらずして、共にあひしらひ日を暮らすこそはかなけれ。

次第に暗うなりければ、北南よりまはっつる搦手の勢一万余騎、倶梨迦羅の堂の辺にまはりあひ、箙の方立打ちたたき、鬨をどっとぞつくりける。平家うしろをかへり見ければ、白旗雲のごとくさしあげたり。「この山は四方巌石であんなれば、搦手よもまはらじと思ひつるに、こはいかに」とてさわぎあへり。さるほどに、木曾殿大手より鬨の声をぞあはせ給ふ。松長の柳原、ぐみの木林に一万余騎ひかへたりける勢も、今井の四郎が六千余騎で日宮林にありけるも、同じく時をぞつくりける。前後四万騎がをめく声、山も川もただ一度にくづるるとこそ聞えけれ。案のごとく、平家、次第に暗うはなる、前後より敵は攻め来たる、「きたなしや、返せ返せ」といふやから多かりけれども、大勢の傾き立ちぬるは、左右なうとって返す事かたければ、倶梨迦羅が谷へわれ先にとぞ落としける。まっさきにすすんだる者が見えねば、『この谷の底に道のあるにこそ』とて、親落とせば子も落とし、兄落とせば弟もつづく。主落とせば家子郎等落としけり。馬には人、人には馬、落ち重なり落ち重なり、さばかり深き谷一つを平家の勢七万余騎でぞ埋めたりける。

そうするうちに、源平両方が対陣する。陣の間隔をわずか 300 メートルぐらいまで詰め寄せた。源氏も進まず、平家も進まず。精鋭の兵を 15 騎、盾の前面に進ませて、15 騎が上矢の鏑を平家の陣に射込む。平家もまた謀と気づかず、15 騎を出して 15 の鏑矢を射返す。源氏が 30 騎を出して射させれば、平家も 30 騎を出して 30 の鏑矢を射返す。50 騎を出せば 50 騎を出して応じ、100 騎を出せば 100 騎を出して応じて、双方 100 騎ずつ陣の正面に進んだ。相対して勝負をしようと勇み立つが、源氏の方から抑えて勝負をさせない。源氏はこのようにして日を暮らし、平家の大軍勢を倶利伽羅谷へ追い落とそうとだましているのに、すこしも気づかないで、一緒になってあしらわれ、日を暮らすのはあわれなものだ。

次第にあたりが暗くなったので、北南から後方にまわった軍勢 1 万余騎が、倶利伽羅の御堂のあたりに回り込んで、腰に下げた矢の箱をたたき、鬨の声をどっとあげた。平家が後ろを振り返ると、源氏の白旗が雲のように高々と持ち上げられている。「この山は四方が岩石だと聞いていたので、後ろにはまさか回るまいと思っていたのに、これはどうしたことか」と口々に騒いだ。そのうち義仲が正面から鬨の声を合わせる。松永の柳原、ぐみの木林に 1 万余騎でひかえていた軍勢も、今井四郎の 6000 余騎で日宮林にひかえていた軍勢も、同時に鬨の声をあげた。前後 4 万騎がさけぶ声は、山も川も一時に崩れるように聞こえた。予想どおり、平家は次第に周りが暗くなる、前後から敵が攻めてくる、「卑怯だぞ、戻れ戻れ」という者どもは多いが、大勢が傾斜地に斜めに立っていると、たやすく引き返すことは難しいので、倶利伽羅谷に我先にと落ちていく。先に進んでいた者が見えないので、『この谷の底に道があるのだろう』と思って、親が落ちれば子も落ち、兄が落ちれば弟も続く。主が落ちれば、家の子郎等も落ちたのだった。馬の上に人、人の上に馬、落ち重なり、落ち重なり、あれほど深い谷ひとつを平家の軍勢 7 万余騎で埋めたのだった。

巌泉血を流し、死骸丘を成せり。さればその谷のほとりには、矢の穴、刀の疵、残って今にありとぞ承る。平家の方にはむねと頼まれたりける上総大夫判官忠綱、飛騨大夫判官景高、河内判官秀国もこの谷に埋もれて失せにけり。備中国住人瀬尾太郎兼康といふ聞ゆる大力も、そこにて加賀国住人倉光次郎成澄が手にかかッて生け捕りにせらる。越前国火打が城にて返り忠したりける平泉寺の長吏斎明威儀師も捕らはれぬ。木曾殿、「あまり憎きに、その法師をばまづ斬れ」とて斬られにけり。平氏の大将維盛、通盛、希有の命生きて加賀国へ引き退く。七万余騎が中よりわずかに二千余騎ぞ逃れたりける。

明くる十二日、奥の秀衡がもとより木曾殿へ竜蹄二疋奉る。一疋は黒月毛、一疋は連銭葦毛なり。やがてこれに鏡鞍置いて白山の社へ神馬に立てられけり。木曾殿宣ひけるは「今は思ふ事なし。但し十郎蔵人殿の志保のいくさこそおぼつかなけれ。いざ行いてみん」とて四万余騎、馬や人をすぐッて二万余騎で馳せ向かふ。氷見の湊を渡さんとするに、折節潮満ちて、深さ浅さを知らざりければ、鞍置馬十疋ばかり追ひ入れたり。鞍爪浸るほどに、相違なく向かひの岸へ着きにけり。「浅かりけるぞや、渡せや」とて二万余騎の大勢皆打ち入りて渡しけり。案のごとく十郎蔵人行家、散々に駆けなされ、引き退いて馬の息休むる処に、木曾殿、「さればこそ」とて新手二万余騎入れかへて、平家三万余騎が中へをめいて駆け入り、揉みに揉うで火出づるほどにぞ攻めたりける。平家の兵どもしばしささへて防ぎけれども、こらへずしてそこをも遂に攻め落とさる。平家の方には、大将軍三河守知度討たれ給ひぬ。これは入道相国の末子なり。侍ども多く滅びにけり。木曾殿は、志保の山うち越えて、能登の小田中、親王の塚の前にぞ陣を取る。

岩間から湧き出る泉は血を流し、死骸が積み上がった。だからその谷のほとりには、矢の穴、刀の疵が今も残っていると聞く。平家方では頼りにされていた大将の、上総大夫判官忠綱、飛騨大夫判官景高、河内判官秀国もこの谷に埋もれて亡くなった。備中国住人瀬尾太郎兼康という評判の力持ちも、そこで加賀国住人倉光次郎成澄の手にかかって生け捕りにされた。越前国火打が城で裏切った、平泉寺の長吏斎明威儀師も捕らえられた。義仲が「あまりにも憎いので、その法師を先ず斬れ」と言って斬られてしまった。平氏の大将軍、維盛、通盛はかろうじて命が助かり加賀国に退却する。7 万余騎の中からわずかに 2000 余騎が逃げおおせたのだった。

翌 12 日、奥州の秀衡のもとから義仲に駿馬 2 頭が献上された。一頭は黒月毛、もう一頭は連銭葦毛である。そのままこれに鏡鞍をおいて、白山神社に神馬として奉納した。義仲が言うには「今となっては心を悩ませることもない。ただし行家殿の志保の戦いが気がかりだ。よし行ってみよう」と言って 4 万余騎の中から馬や人を選抜して 2 万余騎で向かった。氷見の湊を渡ろうとするが、ちょうど潮が満ちていて、深さ浅さがわからなかったので、鞍を置いた馬を 10 頭ぐらい海に追い込んだ。鞍の前輪と後輪の両端が浸かるぐらいの深さで、問題なく向こう岸に着いた。「浅かったぞ、渡せ」と言って 2 万余騎の大軍勢がみな馬を乗り入れて渡った。案の定、行家は散々に追い立てられ、後退して馬の息を休めていたところで、義仲は「やはりそうだった」と言って新手の軍勢 2 万余騎と入れ替えて、平家 3 万騎の中に叫び声をあげながら駆け入り、はげしく揉み合って火が出るほど攻めたのだった。平家の軍勢はしばらくはあらがって防いだが、こらえきれず、そこもとうとう攻め落とされた。

平家方では、大将軍三河守知度が討たれた。これは入道相国清盛の末子である。侍大将たちも多くが命を落とした。義仲は志保の山を越えて、能登の小田中、親王塚の前に陣をとる。